奈良教育大学教育研究支援機構

News Letter

2017.3 第 6 号

Educational and Academic Support Organization

教育研究支援機構の新たな役割

教育研究支援機構長　佐野　誠

ここ数年、アクティブ・ラーニング、インクルーシブ教育、ICT 教育、プログラミング教育、そして AI といった横文字の言葉が教育研究の分野で脚光を浴びております。これらの言葉の意味内容が今ひとつはっきりしないことから、教員養成の現場では戸惑いの声が大きいのではないでしょうか。

教育研究支援機構を構成する図書館および各センターでは、まさにこのような新しい教育研究課題を理論と実践両面の観点からサポートいたします。たとえば、図書館のラーニングコモンズでの講習会や国際交流留学センター主催の交換留学生による発表会開催、次世代教員養成センターの ESD 事業の推進や遠隔講義システムの整備、特別支援教育研究センターの学習支援プログラムの実施、理数教育研究センターの理数教育プログラムの開発、そして自然環境教育センターの防災教育等はこのようなサポートの一端にほかなりません。

本年度から実践型の教員養成、研修機能の強化を目指す第 3 期中期目標・計画が開始されました。また 2017（平成 29）年 2 月には上記の教育課題等が盛り込まれた小中学校の新しい学習指導要領案が文部科学省より提示されました。このような一連の課題を実現するためにも、教育研究支援機構の役割はますます重要となってきております。皆さまの図書館および各センターへのご支援とご協力をお願いする次第です。

奈良教育大学教育研究支援機構

自然環境教育センター
- 教育研究開発部門
- 地域開放部門

理数教育研究センター
- 教育プログラム推進部門
- 先端科学教育部門

特別支援教育研究センター
- 発達支援部門
- 教育実践支援部門

国際交流留学センター

次世代教員養成センター
- 情報教育部門
- ＥＳＤ・課題探究教育部門
- 情報基盤部門

図書館（教育資料館を含む）

【図書館】

1.　図書館の取り組み

図書館では、ラーニングコモンズ等の利用促進を図るため色々な取り組みを行いました。

（1）　ラーニングコモンズの活用

第３期中期目標・中期計画としてラーニングコモンズ等の活用が掲げられており、学生の自主学習の場、グループワークや発表の場として活用するとともに、授業や公開講座の場としても活用を進めています。

昨年度のアンケートでもラーニングコモンズの学生の認知度は高く、連日、勉強の教え合いやグループワーク、模擬授業の練習等で活用されています。

授業では、日本人の学生と留学生がお互いに議論しながら異文化理解を深めていく授業等に活用されているほか、一般の方を対象とした公開講座の場、留学生の修了発表会の場としても活用されています。

今年度新規の講習会として、電子黒板講習会「電子黒板の First Step!」を開催しました。図書館の学生スタッフであるＩＣＴサポーターが、企画から当日の講師まで務め、受講生のタブレットと連携して漢字クイズの回答を送り合う演習に取り組むなど、参加型の講習となりおおいに盛り上がりました。受講した学生にとっては、近年小学校・中学校に普及が進む電子黒板・デジタル教科書に触れるよい機会となりました。

ラーニングコモンズ風景

電子黒板講習会

（2）　えほんのひろばの取り組み

えほんのひろばの利用促進を図るため、授業等で活用するとともに、地域への開放を進めています。主に幼児教育の授業で活用し、受講生による公開イベント「ぱくぱくおばけのおんがくかい」(7 月 11 日、人形劇、手作り紙芝居)、「なぞなぞクリスマス」(12 月 19 日、人形劇)、「たまごにいちゃん」(1 月 18 日、ペープサート)等を開催しました。

近隣の幼稚園・保育園への広報に加え、近鉄奈良駅の DS ボードでの広報活動なども行い、親子連れの一般利用者が増えてきています。絵本の貸出も増えてきており、今年度で約 1000 冊を一般利用者に貸出しました。

近鉄奈良駅 DS ボード

また、7 月 20 日、図書館内のえほんのひろばにおいて『えほんの読み聞かせ研修会』を開催しました。この研修会は、主にえほんのひろばで活動する学生ボランティアを対象に、えほんの読み聞かせを経験してもらう機会

として企画したものです。講師役には、特別支援学級等で読み聞かせの実践経験の豊富な「たかばたけ・ほんがく倶楽部」(教職大学院の院生グループ)を招きました。

当日は、学生ボランティアや一般学生 19 名が参加し、えほんの選び方や読み方のポイントについて説明があった後、3～4 人のグループに分かれて読み聞かせをお互いに披露し合う形で進められました。

読み聞かせ研修会風景

（3）正倉院漆胡瓶模造復元品展

奈良国立博物館の正倉院展の開催時期にあわせて、当館所蔵の「漆胡瓶（しっこへい)」模造復元品を展示しました（10 月 12 日～11 月 15 日)。大正期から昭和初期にかけて多くの正倉院宝物の模造復元品製作に携わった工芸家・吉田包春氏の作品で、学外からも見学者が訪れ、新聞社・テレビ局の取材を受けました。

当館所蔵の漆胡瓶（しっこへい）

2.　教育資料館での取り組み

教育資料館の利用促進を図るため企画展示等を学内から募集し、以下の展覧会や企画展および各種イベントを開催しました。これらの取り組みには学生ボランティアが企画等を支援してくれました。

- 特別展「描かれた奈良・美術鑑賞としての定点観測」（4 月 5 日～5 月 31 日）
- 地歌箏曲部　「春のミニコンサート」（4 月 13 日）
- 「奈良のわらべうた～納涼コンサート」(7 月 13 日）
- 特別展「理科（化学）教育の昔と今と」（7 月 8 日～8 月 16 日）
- 特別展「装束と文様-奈良絵本しぐれの世界-」（8 月 19 日～8 月 22 日）
- 奈良教育大学フレンドシップ事業<大学生と書道を楽しもう>参加高校生作品展(9 月 24 日～9 月 25 日）
- であいのある世界展（11 月 18 日～28 日）
- 「第 6 回博物館実習成果展示　きてみてガッ展－人々の“想造 ”を掘り下げる－」（12 月 16 日～1 月 11 日）

「描かれた奈良－美術鑑賞としての定点観測」

「理科（科学）教育の昔と今と」

【次世代教員養成センター】

◆ESD・課題探究教育部門◆

1. ESD・教材開発領域

ESD に関する教員研修の加速化

平成 27 年度日本/ユネスコパートナーシップ事業の(5)教員研修プログラムのあり方に関する調査研究を受託し、ESD に取り組む教員に求められる資質能力を明らかにするとともに、ＥＳＤの推進に取り組む教育委員会へのアンケート調査及びヒアリング、全国のＥＳＤ実践者へのヒアリングをもとに報告書を作成しました。28 年度はその成果を踏まえ、ＥＳＤに関する教員研修プログラムを開発し、試行してきました。「ＥＳＤティーチャー（現職教員向け）プログラム認証制度」です。ESD の理解を深めるためには、単発的な研修ではなく、継続的な研修が効果的であるという調査結果から、年間 5 回以上のＥＳＤ連続セミナーへの参加と毎回のミニレポートの作成、及び ESD に関する教材開発と学習指導案の作成を義務づけています。

奈良ＥＳＤ連続セミナー

ＥＳＤ連続セミナーにおける研修プログラムは、第 1 回：地球的諸課題の理解、第 2･3 回：ＥＳＤの理論研修、第 4 回：優良実践事例の分析、第 5 回：作成した指導案の検討、という内容です。この内容に基づき、奈良では年間 12 回、橋本市では 5 回の連続セミナーを実施してきました。奈良の連続セミナーには本学の学生有志も参加し、ＥＳＤを指導する教員に必要な「教師としての基盤的力量」に関して、現職教員から直接指導していただく機会にもなっていました。

橋本市ＥＳＤ連続セミナー

今年度はすでに、橋本市からは 7 名の先生方が、奈良からは 11 名の先生方が、毎回のミニレポートとＥＳＤ学習指導案を提出されています。今年度の数値目標である 10 名を大きく超える成果が見込まれます。

新しい博物館連携の形

奈良市・橿原市・橋本市・彦根市の各教育委員会と連携して奈良ＥＳＤコンソーシアムを組織し、平成 26 年度からＥＳＤの推進拠点作りに取り組んできました。このコンソーシアム事業の一つに、博物館との連携によるＥＳＤの推進があります。これまでの学校による博物館の活用の仕方は、①教員が自己の教養を豊かにするために博物館を訪れる、②児童生徒に調べ学習の一環として博物館を見学することを勧める、③遠足や修学旅行等の学校行事における博物館の利用の 3 つに大別できるでしょう。この 3 つに共通するのは、活用する対象が博物館の展示物であるということです。

奈良ＥＳＤコンソーシアムでも、構成団体である奈良国立博物館との連携方法について試行錯誤を重ねて来ましたが、今年度新たな連携に取り組むことができました。

きっかけは奈良国立博物館の特別展である「忍性展」への協力でした。忍性菩薩は、鎌倉時代の奈良に生きた僧で、ハンセン病患者の救済に生涯をかけた方です。その生き方を児童生徒に紹介したいという博物館からの依頼を受け、授業化することにしました。さっそく、奈良市内の学校に呼びかけたところ、奈良市立伏見小学校、西大寺北小学校、済美小学校、済美南小学校から授業づくりへの参加希望があり、6 回の研修会を持ちました。博物館学芸員が教材や資料を提供し、大学教員が授業化

へのアドバイスを担当し、現職教員が授業実践を行うという、新しい形の博物館との連携です。忍性菩薩のハンセン病患者救済に焦点化した福祉教育の授業実践や、忍性菩薩の十種の誓願や生き方を調査し、自分の生き方と比較して考えるという道徳教育の授業実践など、4 つの小学校では、それぞれ工夫した授業実践が展開されました。今後は、この博物館連携を他の博物館との連携に拡大し、より豊かで学びの多い授業実践に協力していきた.いと考えています。

第 4 回忍性菩薩勉強会の様子

2. 教育臨床・学校カウンセリング領域

教育臨床・学校カウンセリング領域主催により、6 月 12 日（日）に、「学校現場における動機づけ面接（motivational interviewing)の適用- 米国の教育現における教師と子どもの信頼関係構築の最前線を学ぶ－」の講演会を行いました。講師は、米国 NovaSoutheastern Univ.の教員でスクールカウンセラースーパーバイザー、元全米アートセラピー学会会長(2011~2013)の Mercedes B. Ter Maat 氏で、3 時間半にわたり講義に加えて実習を行っていただきました。参加者は、本学学生、小・中・高等学校教諭、スクールカウンセラーなど 41 名の参加がありました。

「動機づけ面接」は、依存症の治療を中心に、そして医療の中での医師－患者のよりよい関係づくりのために、W. Miller と S. Rollnick が開発したカウンセリングアプローチです。本人が変わりたい方向を見出し、それに向かって力を添えて促していくための具体的な方法を示します。日本でも、ここ 10 数年、その方法が医療を中心に広がり、社団法人日本動機づけ面接協会では資格認定も為されていまてきました。

米国ではこの方法は、広く教育現場でも使われており、教員やカウンセラーが子どもたちとのよりよい信頼関係を構築するために、基本的な考え方と具体的な方法を提供するとして知られています。

講演会では、いくつかのミニワークが入るとても楽しいものでした。Mercedes 氏の問いの中に「もし 1 日だけ行動を変えることができたら 500 万ドルくれると言ったら、変えられますか？もし変えられるとしたら、どうしてでしょう？」というものがありました。行動を変えていくときの、メリットデメリットについてのバランスを見つめさせる問いであり、その基本的な考え方は、本人の自己決定をねばりづよく引き出すという、日本の学校教育の中でも生かせるものでした。

Mercedes 氏は、学校心理学の専門家であると同時にアートセラピストでもあるので、講演会の最後にはアートセラピーの技法で動機づけ面接のエッセンスを伝えようとしてくださいました。課題は画用紙を 2 つに折って、「変化のない状況」と「もし変化したとしたら」というテーマで絵を描くというものです。参加者は、突然絵を描くことに対する戸惑いをもちながら、上手に描かなくてもよいことを理解して、自由にそのイメージを表現していました。

最後のアンケートの結果には、「難しいものかと思っていたが、普段の子どもたちとの話しの中で使える方法ばかりだった」「少し意識することで、会話が広がっていくことがわかった」「クレヨンで絵を描くのは幼稚園

ぶりだったが、新鮮な発見があった」などの感想がみられました。

3. 学校・地域教育支援領域

公開研究会「地域で子ども・若者の育ちを支えるとは
―支える人たちの専門性とネットワークづくり―」

（平成 29 年 1 月 21，22 日）

日程： 1 月 21 日(土)13 時～18 時……シンポジウム
1 月 22 日(日)9 時 30 分～12 時……集中検討会
会場：奈良市生涯学習センター
共催：公益財団法人　奈良市生涯学習財団
後援：奈良県・奈良県教育委員会
奈良市・奈良市教育委員会

学校・地域教育支援領域では、学校と地域における教育支援を展開する枠組みや支援者の養成・研修のあり方を科学研究費補助金･基盤研究 B の助成を受けて 2013 年度から追究してきました。

今回の公開研究会では、1 日目のシンポジウムでは、日本における子ども・若者支援を取り巻く情勢、子ども・若者の育ちを支えるうえで大切にすべき課題、についてグループワークも取り入れながら議論しました。

主な内容は以下の通りです。

＜1 月 21 日(土)シンポジウム＞

◎基調報告：生田周二（奈良教育大学）

これまで研究してきた枠組み（自立の 5 側面、第三の領域、社会教育的支援、専門的能力、養成・研修システム）を中心に説明と問題提起

◎パネルトーク：

- 井口啓太郎（国立市公民館）：「生きづらさ」をこえる若者たちの実践と社会教育としての支援
- 浜田進士（子どもの権利条約総合研究所；あらんの家）：困難を有する子供・若者の居場所―自立援助ホーム『あらんの家』の取り組みから―
- 佐野万里子(奈良市生涯学習財団)：地域で子ども・若者の育ちを支えるとは
- 二宮衆一（和歌山大学）：学童保育指導員の資格化をめぐる議論

◎グループセッション：

「自立の 5 側面」、「第三の領域」、「社会教育的支援」、「専門的能力」、「子ども支援と若者支援の共通点および相違点」、「本当に必要な連携とは」、「その他」に分かれて、意見交換しました。

◎全体共有とパネラーからのコメントなど

専門性の意義として、関わる業務・取り組みの自覚化と言語化、職業としての継続性の確保、責任の明確化などのポイントが出されました。また、縦の軸として、自立モデル・概念などへの批判的検討を必要としつつ、幼少期から若者期を見通した関わりや支援の課題の明示化の意義も出されました。横の軸としての連携と子ども・若者支援の共通基礎の整理の重要性などの指摘もありました。

＜1 月 22 日(日)集中検討会＞

2 日目の集中検討会では、地域における支援の取り組みを踏まえ、支援を支える専門的能力とその育成・研修のあり方、「子ども・若者支援士」（仮称）の展望と課題について検討しました。

◎話題提供者

- 井口啓太郎（国立市公民館）：社会教育人材の専門的力量と養成・研修のあり方―日本社会教育学会・PJ 研究「学びあうコミュニティのコーディネーターの力量形成とその組織」の議論を踏まえて―
- 浜田進士（子どもの権利条約総合研究所；あらんの家）：子ども支援において大切にしていること―子どものエンパワーメントを支える支援者の役割―
- 宮崎隆志（北海道大学）：子ども支援に関わる専門職構想に向けて―学童保育を中心に―
- これらの議論の整理の上に、来年度以降、京都、横浜、札幌、神戸などに所在する協力団体とともに、下記の研究に入っていく予定です。
- 「第三の領域」としての「子ども・若者支援」の枠組み、「社会教育的支援」の構造、支援者の専門性の研究
- 支援者の研修・養成システム、カリキュラムの構築、教材の作成

なお、シンポジウムには、北海道や九州などを含め、1 日目 87 名、2 日目 53 名の総計 140 名でした。雪などのため出にくい状況もある中で、たくさんのみなさんに来ていただきました。学生・院生も奈良教育大学を始めとして、大阪、京都、和歌山、静岡などから参加があり、活発な議論を展開することができました。

◆情報教育部門◆

次世代教員養成センター情報教育部門では、情報教育を推進するために「情報活用能力の育成」・「ICT 活用指導力の向上」等をキーワードに様々な取り組みを行っています。ここでは ICT 活用サポーターの活動支援から 2 つ紹介したいと思います。本部門では、学校現場での ICT 活用支援人材の確保と学生ら自身の ICT 活用指導力の向上と目指して、ICT 活用に関する講習会や ICT 活用を伴う学校現場での支援活動のコーディネートなどを進めています。この活動の中から、子ども向け公開講座の企画・実施支援と中学校でのプレゼンテーション指導補助を紹介いたします。

1 つめの活動は、子ども向けの公開講座としてプログラミングと 3D プリンタを体験する 2 つの公開講座を各 2 回の実施です。実施にあたっては学生ら自身がプログラミン（http://www.mext.go.jp/programin/ 平成 29 年 3 月 8 日現在）や 3D プリンタを体験した上で、どのように講座を進行し、どのような準備をすれば、「児童・生徒自らが目標に向かって手順を整理して考えることができるか」を十分に検討した上で、講義内容やワークシートを準備しました。当日は学生らと本部門の専任教員と連携して講座を進行しました。いずれの講座においても、参加した児童・生徒らは学校で習っているいろいろな教科で身につけた力を活かした創意工夫あるプログラムや 3D 制作物を作成することができました。

2 つめの活動は、ある中学校での中学生の職場体験成果の発表会に向けたプレゼンテーションの練習に参加し、発表を聴いて見やすさやわかりやすさなどについて良い点や改善を助言したり、資料作成・修正へのアドバイスや操作支援の活動でした。参加した学生らは、授業支援に入る際にどのように円滑に生徒らと関係作りを図るかや改善すべき点をどのように伝えると生徒らにわかりやすいかなどについて考えながら活動しました。

本学学生（左）が中学生（右）に助言している様子

◆ 情報基盤部門◆

次世代教員養成センター情報基盤部門では、図書館でのラーニング・コモンズでの利活用を受け、平成 27 年度にアクティブ・ラーニングスペースと、遠隔地・小規模での教育活動・研修活動を実現する遠隔講義システムを情報館に整備・拡充しました。ここでは、今年度実際に行われた活用事例を紹介したいと思います。

本部門の教員と奈良県教育委員会や奈良県立教育研究所の先生方との合同での教員免許状更新講習においてアクティブ・ラーニングスペースを活用しました。具体的には、講習内容に応じて、机のレイアウトを講義形式の配置や、話し合い活動や協働作業活動向けの対面配置を変更して実施しました。また、タブレット端末での協働作業や、パネルに書き込みながら話しあい、それを用いた全体共有での発表も行ないました。講師の先生方より、講習のねらいに含まれた「アクティブ・ラーニングを学ぶ」ことも実現できたとの評価も頂きました。

また、奈良県教育委員会と本学の連携事業のひとつである ICT 部会の活動の一環として、奈良県教育エバンジェリストの企画・実施による情報モラルや CMS 活用などの各種教員研修が多数開催され、研修リーダー養成の場として活用されました。

遠隔講義システムについては、本学教職大学院と奈良県教育委員会とで連携して実施されている小学校若手（2・3 年目）教員の授業力等の向上のための研修において、十津川村で実施されている教員研修に本学教員が情報館から遠隔講義システムを通して参加するなどの活用が行われました。

免許状更新講習の様子

【国際交流留学センター】

本センターでは、留学生の受け入れ、および、派遣を通じた国際交流を主眼に、国際的視野を持った教員養成の一端を担っています。また、附属学校園や地域との交流も活発に行い、学内外の国際交流の活性化に努めています。設立3年目の主な活動は、以下の通りです。

（１）受入留学生プログラム

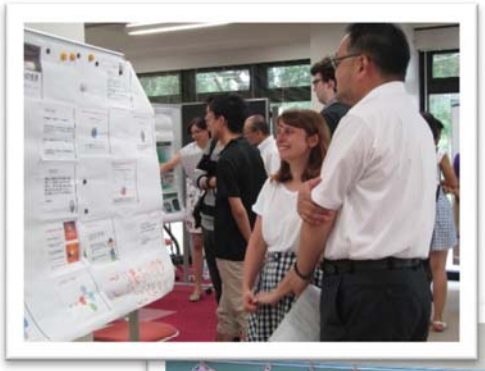
2016年10月現在、本学では、アジア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカの14か国から、47人の留学生が学んでいます。受入留学生プログラムには、(A)日本語による授業が受講可能な日本語日本文化研修留学生や日本語専攻がある協定校からの留学生などに提供されるもの、(B)日本語が未習、または初級レベルの、協定校からの留学生に提供されるもの、そして、(C)海外の現職教員が文部科学省の奨学金を得て、日本の教育事情を研修する留学生に提供されるものの3つがあります。それぞれ、以下のような成果をあげています。

(A) 体験型の日本語学習である「日本語コミュニケーション」では、社会科教育講座教員の協力を得て、日本人学生によるプロジェクトを利用して、テーマ学習を行いました。授業の成果は、随時ホームページで公開した他、7月には、プログラムの最終発表会を公開で行いました。

(B) 12月には、「日本とアメリカの大学生活／日本での経験」と題した日本語による口頭発表、7月には、日英両語でのポスター発表を行いました。また、所属大学と本学との大学生活や制度を比較し、ポスターにまとめて、国際交流室前に掲示しました。これにより、本学の学生が留学に興味をもつことを期待しています。

(C) 日本語・日本文化教育及び地域交流の一環として、山添中学校を2回訪問した他、ホームステイも実施しました。特に山添中学で行ったミニ授業は、ミャンマーの高校教員によるエネルギー問題の紹介、フィリピンの特別支援教員によるクリスマスの文化紹介、韓国の小学校教員による外国ルーツ児童をめぐる道徳の教科書紹介など、グローバルな教員養成に寄与する内容でした。さらに日本語による最終発表会も公開で開催しました。

通常の授業の他に、「来日前準備キット」を送付して留学前からの学習を促進したり、歌舞伎や大相撲見学や旅行などの文化体験の場を提供したりしています。限られた授業数の中で、幅広い日本語レベルの多様な留学生を受け入れるという難しい問題に直面しつつも、小規模大学ならではのきめ細やかな指導を行っています。



（２）留学生・日本人学生の共修機会の提供

① 前期には、教員養成科目「異文化理解研究」と留学生科目「現代日本論」を合同授業とし、日本の学生と留学生との共修を通じた、異文化理解能力育成をはかりました。

② 後期には、教職関連科目「小学校外国語活動」と留学生科目「日本語コミュニケーション」との合同で、附属小学校の外国語活動支援を協働で行いました。

③ その他、「日本語コミュニケーション」の授業で、幼年教育専修の有志学生と附属幼稚園で交流会を実施したり、日本人学生有志と絵本の翻訳を行ったりしました。

これらの共修の取組は、異文化理解の促進や批判的思考力の育成という点で、国立大学法人評価委員会からも高く評価されました。

（３）附属学校園や地域との連携

①　附属学校園との連携

附属幼稚園からの依頼を受け、幼年教育講座との連携で、5歳児を対象に、「日本語コミュニケーション」の受講生が多文化絵本の創作や読み聞かせ、各国の手遊び紹介を行いました。

附属小学校では、「言語・文化」活動として 11 月に行われた 5 年生の授業で、留学生と日本人学生が協働で、さまざまな国や文化の紹介を行いました。

附属中学校では、「日本語教育論」の受講生 8 名が、1 年生を対象とした異文化理解教育の授業の企画、実施を担当し、学生にとっても附中関係者にとっても、異文化間能力を高める機会となりました。

② 地域貢献

ボランティアサポートオフイスなどの関係機関と連携し、主として奈良市の小中学校からの要望により、留学生及び日本人学生を派遣しました。

（４）その他

① 学内における国際交流活発化のための取り組み

月 1 回の国際交流イベント「なっきょん's café」や、4 月の「留学生と友だちになろうキャンペーン」を通して、留学生と日本人との交流の機会を提供し、自主的な交流への橋渡しに努めました。さらに、学生支援課が、田植え体験や若草山ハイキングなど、月 1 回の国際交流イベントを企画しています。

② 派遣留学プログラムへの協力

本学からの派遣留学の奨励のために、学生支援課と連携して、派遣留学プロモーションウィークを開催しました。

具体的には、図書館ラーニングコモンズを利用して、派遣学生による帰国報告会や、TOEFL 受験のための説明会を行いました。

③ 国際的視野をもつ教員養成のためのシンポジウム開催

学長裁量経費を得て、「教員養成大学におけるグローバル人材育成」と題したシンポジウムを 2 回シリーズで開催しました。多様な言語文化背景をもつ子ども達への学習デザインや、新学習指導要領を踏まえたコンピテンシーの育成など、グローバル化がすすむ社会で必要とされる教員の資質や能力について話し合われました。

以上のように、本センターでは、留学生プログラムを核にして、学内における国際交流の環境を醸成すると共に、その活動内容や成果を必要に応じて学内外へ発信しています。また、海外協定校派遣留学生が得た成果を、帰国後に学内に効果的に還元させることにも取り組んでいます。このようにして、本センターは、本学の国際交流の基本方針の一端を担っています。その他の活動の詳細は、国際交流留学センターのホームページ（http://cies.nara-edu.ac.jp/）で紹介しています。

【特別支援教育研究センター】

1.　活動概要

特別支援教育に関わる理論と実践に関する教育研究を総合的に行い、特別支援教育を担う人材の養成に寄与するとともに、地域における児童生徒等の教育的ニーズに応じた特別支援教育推進に貢献します。主な事業内容は、①特別支援教育の内容と方法に関する理論的実践的研究、②教育学部、大学院の特別支援教育に係わる人材養成とスクールサポーター、特別支援ボランティア等の学生の研修等の実施、③発達障害もしくはその疑いのある幼児から高校生を対象とした教育相談・発達相談、④教育委員会等と連携した共同研究、⑤特別支援教育に関する公開講座および研修の実施です。スタッフは、児童精神科医、臨床心理士などの専門家です。平成 28 年度から「学校教育体系全体を視野に入れたインクルーシブ教育システムの構築と合理的配慮・ユニバーサルデザイン教育の開発」に取り組み、今後よりいっそう地域連携に基づく教育相談・発達相談の充実を目指します。

2.　平成 28 年度研修事業

【 公開講座 】(現職教員対象)　平成 28 年 7 月 26 日(火)

テーマ「場面緘黙と発達障害の関係とその支援を考える」

講師：根來秀樹（教職開発講座 教授・特別支援教育研究センター センター長）

＊29 年度研修事業は、順次 HP にアップします。

＊28 年度に HP をリニューアルしました。

URL:http://cp-support2.nara-edu.ac.jp/hp/

3.　平成 28 年度相談事業

【 保護者・子ども向けプログラム 】

① 寺子屋

学習困難のある児童を対象とした学習支援です。読み書きの評価に基づき、タブレット等を活用しながら、一人一人の子どもの特性に応じた支援を行っています。少人数（登録制）の学習支援を週 2 回、実施しています。

② 夏休み!!宿題おたすけプロジェクト

センターでの初の試みとして、発達障害のある子どもたちを対象とした学習支援プログラムを実施しました。学ぶ力はあるのに、衝動性や注意集中困難、読字書字困難、こだわりや感覚過敏などの認知や感覚のアンバランスによって通常の指導ではうまく学習が進まない子どもたち。

教育大学ならではの環境を活かし、教員を目指す学生、教職大学院で学ぶ現職教員が「おたすけ隊」になり、センターの発達障害を専門とする臨床心理士、児童精神科医、作業療法士らスタッフとともに、3 日間、たくさんの夏休みの宿題に取り組みました。学習支援プログラムの一方で、保護者はペアレント・トレーニングを受講。「子どもの学習支援」、「ペアレント・トレーニング」、「学生や現職教員が発達障害のある子どもたちへの支援方法を学ぶ研修」を兼ねた事業となりました。

【 教師向けプログラム】

ティーチャートレーニングクラス

発達障害のある子どもの支援に携わる教員 7 名が参加しました。7 月～12 月の全 6 回、応用行動分析学に基づく理論と効果的な支援方法について学びました。2 月にフォローアップが行われ、クラス終了後の成果が報告されています。

【 個別相談（発達相談・教育相談）】

平成 28 年度は延 286 件（2 月 21 日時点）の相談がありました。ホームページから WEB 申込ができます（予約制）。

【理数教育研究センター】

優れた理数系教員の養成を目指す当センターの活動では、本学学生の教育ならびに学校現場・地域との連携のもと、平成 28 年度も多くの事業を企画・立案して実施してきました。以下、それらの一部を紹介します。

1.　サマースクール 2016 イン曽爾

10 年を超える奈良県曽爾村との今年度の連携事業は 8 月 27 日（土）～28 日（日）の二日間（1 泊）で実施しました。内容は以下の通りです。

1 日目

- 開校式
- 「川の水質調査」、「虫取り」（小学生対象、大学教員が実施）
- チャレンジ・サイエンス（中学生対象の理科・数学ブース、学生・院生が実施）

2 日目

- サイエンス・ルーム（小学生対象の理科・算数ブース，学生・大学教員が実施）
- チャレンジ・サイエンス（中学生対象の理科・数学ブース、学生・院生が実施）
- 閉校式

後日、曽爾中学校生徒たちがサマースクールの様子をポスターにして送ってくれました。存分に楽しんでくれたようです。2 日間の様子は、一部を下記（**活動の様子①**）に示しますが、当センター・ホームページにも掲載しているのでどうぞご覧下さい。

このサマースクールは本学の特色プラグラム「スーパー・サイエンス・ティーチャー（SST）」の一環です。学生は理科・算数・数学の教材研究とともに、小学生・中学生、また学校現場の先生方と接していく中で教育現場での実践経験を積んでいきます。

【 活動の様子① 】

川の水質調査

チャレンジ・サイエンス①

チャレンジ・サイエンス②

2.　サイエンススクール イン 五條

五條市教育委員会との連携の下、8 月 8 日（月）に五條小学校と吉野川の河原を会場に開催しました。予想を超える 50 人近い児童・生徒が参加してくれました。

開校式の後、次の 4 つの講座を開講しました（**活動の様子②**）。

- 「川の中の生きものと水質調査」（藤井智康教授担当）
- 「シャボン玉のかくれた力」（常田　琢准教授担当）
- 「見えないものを観る～霧箱で放射線を観察しよう～」（片岡佐知子特任准教授担当）
- 「マイナス１９６度の世界」（松山豊樹教授担当）

【 活動の様子② 】

川の中の生きものと水質調査

シャボン玉のかくれた力

マイナス 196 度の世界！

各講座を実施するに当たり、五條市教育委員会の皆さんとともに、本学学生・教員が各講座のサポートを担いました。当日は非常に暑く、参加者もスタッフも倒れないように気を遣いながらの実施でしたが、後日送られてきた参加者アンケートの結果によれば非常に好評であったようです。

3.　「サイエンス・チームなら」の共同実施

今年度から 3 年間にわたり、奈良県立教育研究所と共同で JST 採択事業「サイエンス・チームなら」（中高生の科学研究実践活動推進プログラム）が始まりました。この連携事業は高校教員に高校生の研究を指導できる力量をつけてもらい、高校生の科学研究を推進しようというものです。奈良女子大・奈良高専も連携機関として参画しています。

本学では理数センターが中心となり、高校教員への指導力向上研修会や推進協議会を研究所と共同で実施するとともに、とくに今年度は地学（天文）分野のテーマについて、信川正順特任准教授が中心となり直接・間接に高校教員・高校生にアドバイスし指導しています（**活動の様子**③）。さらには生徒の発表会へも参画し指導や助言をおこないました。今後、地学分野に限らず、物理・化学・生物の各分野に関わるテーマについても必要に応じて対応し、奈良県の高校生がサイエンスとその研究をより進められるよう、事業を進めていきたいと考えています。

【 活動の様子③ 】

第 1 回指導力向上研修会

地学班生徒への指導 ①

地学班生徒への指導 ②

【自然環境教育センター】

１．実習林の砂防堰堤工事進捗

2011 年 9 月の紀伊半島大水害において最大規模の深層崩壊が本学奥吉野実習林で発生してもう 5 年がたちました。あれから深層崩壊の中心である赤谷では国土交通省による砂防堰堤工事が進められてきました。この間、幾度も大規模な出水があって工事は一進一退して、当初計画が大幅に遅れることになってしまいました。2014 年 8 月の出水時は、完成間近の 2 号砂防堰堤が大きく破損するとともに、実習林の建物も土砂に埋まってしまう土砂災害を被りました。しかし 1 号砂防堰堤（図 1）と 2 号砂防堰堤（図 2）が 2017 年 2 月に完成したことや河床が掘削されたことで、新たな崩落土砂を受け止めることができるようになり、ようやく一時に比べて安全性がずいぶんと高まりました。

図 1. 完成間近の 1 号砂防堰堤（2016 年 12 月 20 日）

図 2. 2 号砂防堰堤と崩落地（2016 年 12 月 20 日）

２．授業等代替措置

実習林開催予定だった実習や公開講座などの代替措置を 2016 年度も行いました。「野外実習―自然の中の理科教育―」は五條市立大塔小中学校で行い、「生活（キャンプ実習）」は奈良実習園、公開講座「夏の森を親子で楽しもう」は上北山村立上北山小学校で行いました。それぞれキャンプですから、テントを張って焚火で料理をする生活が主となります。今年度も代替地で何とか行いましたが、自然観察に適した森を見つけるのが難しかったり、山の中での生活体験を満足にできなかったりで、実習林に比べるとどの代替地も十分ではない印象を受けてしまいます。しかも毎回キャンプ道具一式を用意して代替地へ移送しますので、苦労が絶えません。

３．奈良実習園での栽培

実習園では、相変わらずニホンジカ、イノシシ、アライグマなどがやってきて田畑を荒らしています。これらに対しては防鹿柵などで防いでいます。

最上手にある田圃では農薬を用いないイネの栽培を始めて 2 年目になりました。今年も目立った雑草は出現せず、順調に栽培できています。夏野菜を育てている畑でも農薬の使用を控えていて、旺盛な雑草とさまざまな昆虫がにぎやかに現れて生産量に被害をあたえてはいますが、公開講座「畑で汗を流しませんか」や栽培実習等で夏野菜などを育てている受講生らには無農薬ということで好印象を与えています。

４．奈良実習園のトイレ案件

実習園の汲み取り式のトイレを何とかしてほしいという意見が挙がっています。たとえば、近隣幼稚園・保育園などから年間 1､000 人ほどの園児が来て芋ほりなどをするのですが、トイレの穴に落っこちそうで怖いという話を聞きます。そういった意見を受けて、実習園のトイレ改修を数年来検討しています。

現状では奈良実習園の敷地までは水道管が敷設されていません。奈良市企業局下水道建設課担当者に尋ねると､平成 28 年度中に奈良教育大学にて水洗トイレへの設備更新の予算が措置されて、設備工事を行うこと

が決定したのならば、秋以降に水道管延長工事を行うことも可能であるとのことでした。2016 年 4 月に学長裁量経費に応募しましたが、予算確保はされず、水道管・トイレともに未着工です。

５．３センター協働防災プロジェクト

昨年度に引き続き、学長裁量経費（教育改革経費・プロジェクト経費）の支援を受け、「内陸型自然災害に特化した体験型の防災教育プログラム開発―自然環境教育センター・保健センター・理数教育研究センター協働防災プロジェクト―」が実施されました。本プロジェクトにおける今年度の活動の概要は以下のようなものです。

1）新入生研修における防災教育：赤谷深層崩壊現場見学（4 月実施）

2011 年の東日本大震災以降、防災教育の重要性はあらためて認識され、今後、野外活動や防災に関する活動に対する必要性が増すことが考えられます。理科教育講座では、今年度からの新しい試みとして、新入生研修における防災教育と野外体験を取り入れることとしました。五條市大塔町宇井の旧大塔小学校及び教員宿舎を宿泊地とし、一泊二日の研修を実施しました。また研修では、国交相の協力のもと安全性を十分に確保した上で、大規模な深層崩壊現場を有する自然環境教育センター奥吉野実習林を教材とした見学会を実施しました。

2）教員免許更新講習「選択領域」「共通コース」における講座「奈良の自然災害を知って子供を守る～防災教育入門～」の新規開設（8 月、10 月実施）

本講座では、本学の教員に加え、国土交通省、奈良県知事公室防災統括室、奈良県教育委員会からの講師を迎え、現職教員に向けた防災教育を行いました。具体的には、防災教育推進プランの紹介や思考シミュレーションの手法を用いた課題を扱いました。防災教育においては、本学の学生への教育という”未来の教育”に対する視点も大切でありますが、それと同等に、地域の教育を支える現職教員の”現在の教育”に対する視点も大切であります。今年初めて開設された講座であり、8 月と 10 月の 2 回実施されましたが、いずれも 50 名の定員が埋まる状況でありました。

3）防災プロジェクト講義「災害後のメンタル・ケア～特に子供の心について～」（11 月実施）

本講義は、保健センターのセンター長である辻井啓之 教授を講師としてお迎えし実施されました。阪神・淡路大震災を契機に、大災害後のメンタル・ケアの必要性が考えられ始め、現在ではメンタル・ケアに関する知見も充実してきています。そこでは、天災、人災の両側面から、メンタル・ケアの重要性とともに、誤った認識があぶり出されています。将来教員となり、地域の中心的役割を担うことが予測される本学学生にとっては、知っておくべきことが多いと考えられました。講義では、サイコロジカル・ファーストエイドの紹介などが行われ、常日頃からのストレス・マネージメントの重要性や教員となる学生のための防災教育の重要性が語られました。本講義は、本学の防災訓練と同じ日に実施し、学生や教員の多数の参加を期待していましたが、実際には学生・教員・事務職員を含め 28 名であり、はからくも大規模災害に対する危機感の欠如をあぶり出す結果となりました。

4）センター協働防災プロジェクトのホームページ開設（9 月実施）

2015 年度より開始した本プロジェクトにより得られた防災教育に関する知見を、広く地域社会に還元するために、また、今後本プロジェクトにより実施される様々な活動に本学全体や地域社会の方々がより多く参加していただくために、ホームページを開設しました（http://mail2.nara-edu.ac.jp/%7Emasaki/Center_Cooperative_Education_Project_for_Disaster_Prevention/EPDP_Home.html）。本プロジェクトが中心となり、これまでに構築した地域連携の基盤をさらに強固なものとすることで、本学ミッション“地域の教員養成機能に関して中心的役割を果たす”ことを目指しています。

2016 年度以降も防災教育を進めるうえで幾つか検討課題がありますが、予算措置も含めて活動内容を充実させてゆく必要を痛感しています。

◆◇◆

図書館

https://libwww.nara-edu.ac.jp

次世代教員養成センター

http://jisedai.nara-edu.ac.jp/

国際交流留学センター

http://cies.nara-edu.ac.jp/

特別支援教育研究センター

http://cp-support2.nara-edu.ac.jp/hp/

理数教育研究センター

http://nesm.nara-edu.ac.jp/

自然環境教育センター

http://www.nara-edu.ac.jp/ECNE/

◆◇◆

奈 良 教 育 大 学

〒630 － 8528　奈良市高畑町

奈良教育大学教育研究支援課

TEL：0742 – 27 - 9303

E-mail: kyoken-shienka@nara-edu.ac.jp